

助成財団

研究者のための

助成金応募ガイド

2007

より

本誌では過去3回「助成金応募の手引き」をご紹介してきました。その内容は、助成財団センターのWEBサイト(www.jfc.or.jp)に全文を掲載しているので、ぜひご参照ください。

今回は、これまでにご紹介した内容はなるべく繰り返さないようにし、あらたな視点として、文科省科学研究費補助金や民間助成金の獲得に高い実績を有する研究者からのヒアリングにもとづく体験的申請書作成法をご紹介します。なお、複数の研究者からヒアリングを行っておりますので、本稿では研究者個別の情報は捨象して一般化した表現としました。

1. 情報の入手

申請書の作成の前に、まず応募先が要求している研究がどのようなものであるのかということを十分に理解して下さい。このことは民間助成金に限らず、科研費でもその他の府省の競争的研究資金の場合でもまったく同様で、基本中の基本です。

応募要項を熟読し、趣旨を理解すると共に、研究期間や金額、あるいは体制についての制限事項も把握しておくことが大事です。また、財団の助成意図を理解するうえでは、過去の助成実績を見るのが何よりも有効です。近年では、ほとんどの財団がWEBサイトで情報を開示するようになっており、応募情報とならんで過去の助成実績も知ることができます。こうした情報を体系的に入手するには助成財団センターのサイトがきわめて便利です。ぜひご活用ください。

さらに、自然科学系の助成の場合は、科学技術基本計画などのトレンドを把握しておくことも重要です。民間財団の選考委員の多くは科研費の選考にも携わっており、財団の選考も常に最新の科学技術のフロンティアを念頭において行われるからです。

2. 体験的申請書作成法

以下、助成金獲得の成功者から聞き集めた申請書作成のエッセンスをご紹介します。

(1) 基本的なスタンス

「審査員は、減点箇所をまず探すのだから、弱点は晒さないこと。例えば、水銀や鉛を素材に使うというような研究企画は、脱水銀・脱鉛という潮流からすればそれだけで大きな減点となる。」これは、審査委員経験も豊富な先生の言葉です。選考はたいていの場合、採択予定数の数倍から、ときには数十倍という応募の中から行われます。したがって、選考委員の意識は加点法ではなく、減点法になっているようです。「明らかな減点箇所が見つかったら、そこから先は読まなくてもいいので楽になる。」というきついコメントもありました。

(2) 読み手を意識する

申請書とは「他人である評価者に自分の研究内容を正しく理解してもらう」ことですから、そのために「なにより大事なものは、読み手の立場に立って分かりやすく書く」ということです。その際、「読者は必ずしも専門家とは限らないという前提に立つことも必要」です。一般に、民間財団の場合、選考委員はおのずと専門外のことについても判断せざるを得ないこともあり、あまりに専門的に細かすぎる書き方は、理解を得られない場合があります。

「申請書として主張すべき眼目は、『いまなぜこの研究が必要なのか』、そして『いまなぜ自分が取り組むのか』ということである。要するに、自分こそがこの研究を遂行する最適任者であると、読み手である審査員に訴えることなのである。」この基本姿勢を忘れると、読み手に熱意は伝わらないこととなります。

(3) 申請書の表現技法

さらに表現方法について、「自分をもっともアピールしたいデータや写真などを図版として盛り込むことは有効」です。最近の科研費の申請書では、カラー図版や精密なイラストなどがごく当たり前になっています。文字よりも圧倒的に情報量が多いのですから当然のなりゆきでしょう。ただし、文章の流れとマッチして適切にレイアウトされていないと、かえって全体に粗雑な印象を持たれやすいので図版の使用は諸刃の剣でもあります。

以下は、ある先生の体験的技法論です。あえて解説するまでもなく明快なので、そのまま引用させていただきます。

「これまで申請書作成の中で最もエネルギーを注いだのが、タイトル、第1ページ目の研究目的の記述、ページ間の整合性の3点である。

タイトルには凝る。研究全体を包括し要点を凝縮したキーワードをまず創る。そこに、地域、時代、素材などの要素をつけ加えていく。記述的なタイトルは良くない。テキスト本文中の見出しもタイトルに準じて大事。

研究目的は第1ページであり、ここを読んでもらえるかどうか勝負。

まず、全体を説明する前文を置く。そこでは究極の目標を2 - 3行で格調高く謳いあげ、次に計画立案の経緯・背景を2 - 3行で説明する。経緯を述べるのは、自分の実績をベースにそれを発展させるのだということを主張するためである。

前文の次にくる本文では、目的、特色、位置づけの三部構成をとる。その際、見出し+箇条書きのスタイルとする。例えば、目的が複数の場合は、目的Aの見出し、目的Aの2 - 3行の説明、目的Bの見出し、目的Bの2 - 3行の説明というようにはっきり分けて記述する。次いで、特色や位置づけを述べるとき、目

的A, Bにそれぞれ対応するように特色A, B、位置づけA, Bをレイアウトすることが見やすくするポイント。この目的、特色、位置づけの中での対応関係をくずさないということが、に掲げたページ間の整合性ということである。」

以上、ご紹介したのはあくまでケースであって、これが絶対ということではありません。

総合科学技術会議の中で「競争的研究資金」のあり方を検討した委員会では、従来の申請書があまりに短く、これでは過去の実績を評価するだけで、これからやろうとする研究計画の評価はできないという極めてまっとうな意見がありました。今後、申請書のあり方も徐々にこの意見が示唆する方向に向かうと思われれます。